



## 人生で唯一の失敗とは

部長 大塚 俊明

連日の熱戦に沸いたミラノ・コルティナ五輪も、先日、無事に閉会式を迎えました。

私事になりますが、私はこれまでに二度、会場の一つであるコルティナ・ダンペッツォを訪れたことがあります。一度目はまだ学生の時です。それは、コルティナの北東に位置する「トレ・チメ・ド・ラバレド（ラバレドの三つの頂）」の岩壁を登攀するという、当時の私たちにとっては大それた「挑戦」の時でした。

しかし、その挑戦は雪が舞う悪天候に見舞われ、ルートを見失い、岩壁の途中で断念せざるを得ませんでした。今振り返れば、明らかな実力不足だったのだと思います。失意の中でコルティナの街へ下山した時の情景は、今でも鮮明に蘇ります。私たちにとってこの街は、「挑戦」と「失敗」を象徴する場所となりました。

今大会、そのコルティナ・ダンペッツォで行われた女子滑降に、優勝候補の一人として出場したのがリンゼイ・ボン選手（米）です。彼女は2010年バンクーバー五輪の金メダルをはじめ、数々の栄光を手にしたながらも、膝の怪我により2019年に一度は引退しました。しかし2024年に現役復帰を果たした、まさに筋金入りのアスリートです。

そんなボン選手ですが、五輪直前の1月30日のワールドカップで転倒し、左膝の靭帯を断裂するという悲劇に見舞われました。強行出場した今回の本番レース。序盤で旗門に右腕が引っかかり激しく転倒。5度目の五輪は、無念の途中棄権という結果に終わりました。

41歳の「挑戦」は、記録の上では失敗に終わったのかもしれませんが。しかしレース後、彼女は次のような言葉を残しました。

「もし私の歩みから何かを受け取ってくれるなら、皆さんには大胆に挑む勇気を持ってほしい。人生で唯一の失敗は、挑戦しないことだから」

初等部の子どもたちにとっても、この一年様々な「挑戦」があったことでしょう。中には、思い通りの結果が得られず、悔しい思いをしたこともあったかもしれません。しかし、ボン選手の言葉を借りれば、それは「失敗」ではありません。そのために懸けた情熱、そこに至るまでの努力、そして何より「挑戦した」という事実。それこそが、次の自分を創るかけがえのない財産になるはずです。

iPS細胞の開発で知られる山中伸弥先生は、ノーベル賞授賞の際に「失敗すればするほど幸運がやってくる。皆さん、若いうちにどんどん失敗してください」と語っています。大きな成果を上げることができた人は、「失敗」が成功への不可欠なプロセスであることを知っています。

卒業を迎え、新たな一步を踏み出す6年生には、一見失敗に思えることでも、むしろそれを糧にして自らの道をたゆまず進んでほしいと願っています。そして私たち大人も、子どもたちの歩む道を、目の前の結果だけで判断せず、長い射程で見守っていききたいものです。

年度末、一つの区切りを迎えます。子どもたちのすべての経験が、来年度への糧となることを期待して、令和7年度を締めくくりたいと思います。